

ずいそう

友釣りを未来に

松本 久



最初のダム現場で先輩に鮎の友釣りに連れて行ってもらった。30年前である。場所は岐阜県、天下の名川・馬瀬川の支流弓掛川の解禁だ。

快晴で透きとおった水がきらきらと光を反射している。木々の緑も鮮やかだ。川幅が狭く、女房に頼んでこの日のために月賦で買った8.1mの竿が長すぎるくらいで、はやる心を抑えながら一本抜いて7mにして立ち込んだ。

流れが強くてうまくおとりが沈まない。2匹目のおとりももたもたしている間に弱ってしまい、先輩の目を盗んで、おとり缶から1匹(実は2匹)拝借してしまった。中にはすでに10匹以上の鮎が潜んでいる。買って来たおとりと違って、あっという間に流芯に入っていく。竿を構える間もなく引き込まれる。取り込み方をすっかり忘れてしまい、タモで追いかけて回し、やっとの思いですくいあげた。もっと大きいかと思ったが18cmくらいで、背びれが高く体側の黄色い三日月模様も鮮やかで、「やった！」感動が込みあがってくる。その後私は3匹しか掛からなかったが、先輩はじめ一緒に来ていた他の方々数十匹釣り上げていた。

昼になり、河原でたき火を焚き、串刺しにした鮎を缶ビール片手に塩焼きにする。一人は腹を開いてはらわたをせっせとビンに入れ塩漬けにしている。後でわかったが、これは「うるか」といって最高の珍味になる。もう一人の先輩は開いた鮎に軽く塩をふり、大きな岩にぺたぺたと張り付けだした。天日干しだ。帰る頃には立派な一夜干しになるという具合だ。来たときは休む間も惜しんで釣るのかと思っていたが、実はこういうことも楽しみだったのだ。

以来、単身赴任になっても夏は完全に鮎ばかりになってしまった。次のダム現場は三重県、名張川。上流を長瀬太郎川といって、型は小さいが数が釣れる。特別解禁の日、所長以下数名で前夜からテントを持ち込み、徹夜で場所取りして臨んだ。まだ暗いうちから川に立ち込んで竿を出す。少し明るくなって回りを見回すと竿だらけでほとんど移動できない。先に私に掛かった。すぐおとりに交換して送り込むとまた掛かった。どうやら私の場所が絶好のポイントでほとんど同じ場所で次々に掛かる。そのうちに釣れない対岸の釣り人達も手を休めて私を見学しだした。

取材で来ていた新聞記者も見ていたので声をかけて私の竿を握らせた。「掛かった！」取り込みができないので、私がおとりを付け替えてやると同じ場所でまた掛かった。腕ではなく場所だったのだ。結局その日は私が竿がしらで、喜んだ記者は翌日の朝刊にタモの中にいっぱい入った鮎を見てにんまりする私の写真を載せてくれた。

二年前、初めて九州に転勤になった。筑後川は大分県の日田市に入って三隈川と名前を変え、さらに玖珠川と大山川に分かれる。ここの鮎は「ひびき鮎」といって盛期には30cmを超える尺鮎も釣れるという。

ちっとも大型がつかないままシーズンも終盤になり、鮎は福岡県との県境にある夜明ダムのバックウォーターまで下ってくる。9月はじめ、満を持して太仕掛けに変え、腰まで浸かりながら竿を出した。対岸に陣取った人は岸の上からだだが、長い仕掛けでうまくポイントに流し込んで釣っている。こちらからは胸まで浸かってもそのポイントには届かない。そのうち夕方5時が過ぎ、他の人は引き上げだした。私だけが日が落ちかけた川に胸まで浸かっている。

あたりはシーンとしている。あきらめかけて腰までの深さに戻りかけたとき、竿が弓なりになりキーン！と鳴った。明らかに大物だが腰までの深さがあるし、流れも強くないので意外と早く寄ってくる。27cmはある。おとりには大きすぎるが、思い切って付け替える。すぐ掛かった。どーンという重い引き、さっきとほとんど同じ大きさ、夢中で付け替え、また送り出す。5匹掛かったところでピタッと続かなくなった。気がつくともわりはすっかり暗くなり、おとり缶の場所も探すほどになっていた。あわてて片付け、懐中電灯を頼りに土手を這い上がり車に戻った。尺には届かなかったが、心地よい疲れが体を満たす。結局この日が九州での最後の釣りとなった。

今は現場勤めもなく、釣りも思うように行けなくなった。ずっとダムに携わってきたため、かえって自然を大切にしたいと思う気持ちが強い。これからは孫やその子供も鮎釣りののできる日本の川を残すために少しでも役立つことをしたいと思っている。